

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

ホームページ

<http://shakaitusushin.cool.coocan.jp/>

発行所〓社会通信社

発行人〓滝野 忠

e-mail: shakaitusushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目一八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話/FAX(03)3299-5367
振替〓0010019158431 労金〓中央労金本店No1154163

購読料〓月額(郵送350円・メール175円)

6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

科学的社会主義と俗流社会主義

なぜ逆戻りするのか？

原野人……2

「生産性三原則」批判こそ

―一六春闘、連合運動への総括視点―

滝野 忠……3

◇小原稔さんからの手紙◇
国労運動の過去、現在、未来

―歩前に出る戦いを―

小原 稔……5

「沖縄の思い×沖縄への思い」No.12

『どの故郷にも戦争に使う土砂は一粒もない』

毛利 孝雄……8

―辺野古埋立土砂搬出反対全国連絡協議会・沖縄学習交流会レポート―

老朽原発再稼働を許さない！原発のない町づくりを

稲村 守……11

―四〇数年ぶりの美浜集会に三〇〇人！―

読者からのおたより……

12

旬刊社会通信

NO. 1219

二〇一六年七月一日号

二〇一六年七月一日発行
(毎月一日・二五日二回発行)

科学的社会主義と俗流社会主義

なぜ逆戻りするののか？

マルクスは、『資本論』第1巻を著した八年ほど後に、『ゴータ綱領批判』で次のように述べている。

「いつの時代にも消費手段の分配は、生産諸条件そのものの分配の結果にすぎない。しかし、生産諸条件の分配は、生産様式そのもの一特徴である。たとえば資本主義的生産様式は、物的生産条件が資本所有と土地所有というかたちで働かない者のあいだに分配されていて、これにたいして大衆はたんに人的生産条件すなわち労働力の所有者にすぎない、ということを生産の諸要素がこのように分配されておれば、今日のような消費手段の分配が自ら生じる。物的生産諸条件が労働者自身の協同的所有であるなら、同じように、今日とは違った消費手段の分配が生じる。俗流社会主義はブルジョア経済学者から（そして民主主義者の一部がついで俗流社会主義者から）、分配を生産様式から独立したものととして考察し、また扱い、したがって社会主義を主として分配を中心とするものであるように説明するやり方を、受けついでいる。真実の関係がとつきの昔に明らかにされているのに、なぜ逆もどりののか？」（マルクス・エンゲルス全集第19巻22頁）

マルクスやエンゲルスやレーニンや向坂と対照的に、資本主義的蓄積の一般的法則とその歴史的傾向を理解できないか、軽視するものは、相変わらず「逆もどり」している。今日でも俗流社会主義者や社民主義者やブルジョア経済学者は、格差の拡大や貧困の深刻化を大いに強調はする。しかしそれは税制等の改革で解決できるかのようについて、根本的なことには触れようとしない。

収奪者を収奪して、「物的生産諸条件が労働者自身の協同的所有」に変革されなくてはならないということは主張しない。革命も国家権力の階級的移行も消えてしまう。「多国籍企業」による影響か、今日の国家が独占資本の階級的支配機関であることも忘れてはいる。労働者階級の闘いが強くなる時、一時的に格差や貧困や失業等々を多少是正することはできても、その闘いが弱まると、たちまち新自由主義のごときむき出しの資本主義が現れることも忘れてはいる。

命と生活を守るために、市民や学生や様々な階級、階層による当面する闘いは重要さを増している。これらの闘いと戦略目標との関係を明確にすることも不可欠である。俗流社会主義者によると、科学的社会主義を戦略目標とする政党がなくとも、社民主義や構造改革の政党があればよいことになる。スターリンが活躍していた時代、大戦終戦の翌年に世界に先駆けて書かれた『歴史的法則について——社会革命の展望』（『日本革命と社会党』向坂、社会主義協会）をきちんと読んではいない。だから今日の条件における平和革命とは何か、を理解していない。ソ連崩壊、中国変質の根本原因も解っていない。そのため今日の中国の市場経済にも幻想を抱く。

（原野人）

「生産性三原則」批判こそ

— 一六春闘、連合運動への総括視点 —

春闘・変質

二〇一六年、春闘は変質させられた。連合が「生産性運動はいわゆる『春闘』が今年六〇年を迎えたことと軌を一にしている。『生産性三原則』は春季生活闘争のもつ意義の『基本中の基本』、経営者に『生産性向上に向け協力を惜しまない代わりに、果実は必ず分配してくれ』とプレッシャーをかけることによって、生産性向上に向けた好循環の歯車が回り出す。」(月刊連合 二〇一五年四月)

これは現連合会長の言だ。神津君はこの発言で、階級的労働運動に「勝利」宣言を發したのだ。だから、彼は①「生産性三原則」にもとづく生産性向上運動が労働運動の柱、②生産性向上への協力を惜しまない、③生産性向上への協力がデフレを克服し、経済の好循環をつくる、④これが連合の労働運動といったのである。

国労「綱領」

日本労働運動は新たな段階に入った。総評労働運動は資本主義にかわる社会主義社会を求めた。その指針は今も国労綱領に輝きを放つ。第一項はこうである。

「われわれは、労働者階級の団結した力によって、生活と権利を守り、労働条件を改善するためにたたかう。これらのたたかいを通じて、資本主義社会が労働者の搾取をつよめるものであることを認識し、われわれは、労働者階級の解放をめざしてたたかう。」

独占資本とその委員会の自民党政府は、「階級」、「搾取」、「労働者階級の解放」を敵とする。彼らは、総評労働運動Ⅱ階級的労働運動破壊のため、思想攻撃をはじめあらゆる手段を動員した。日本生産性本部を使い、労働組合を懐柔・分断した。その塊が生産性向上への協力を旗印とするJC、ゼンセン同盟等であった。一九七〇年代末から始まった労働戦線の再編成は、階級的労働運動の総評をつぶし、労資協調の労働組合を日本労働運動の「四番」とすることであった。

労働者と「働く者」

連合結成から二七年、連合は労資協調の組合であることを、春闘方針で示したのだ。それは連合がめざす社会像「働く者を軸とした安心社会実現」にはつきりと見てとれる。連合のそれまでの社会像は「労働者を軸とする福祉社会建設」だった。この変化はなにを語るか。第一、「労働者」が「働く者」へと変えられた。第二、「福祉社会」が「安心社会」に置き換えられた。

「労働者」という言葉は資本と賃労働の対立、階級社会を前提とし、搾取、したがって搾取からの労働者階級の解放Ⅱ社会主義社会実現をふくむ。

「働く者」にはソレがない。連合は「働く者」を、「生活者、納税者、消費者、働く者」と説く。資本家も生活者であり納税者、消費者であり生活者である。労働者も

同じである。「働く者」は階級そして階級対立を消し去った。そこにあるのは「階級協調」と「友愛」の思想である。

生産性三原則はだれがヒネリ出したか。政府・独占資本と彼らの「坊主たち」である。なんのために、階級的労働運動を階級協調にとつて変えるために。

こう考えれば「福祉社会」が「安心社会」に変えられたわけもわかる。「福祉社会」は、一九二〇〜三〇年代の世界的規模での激しい階級闘争が、資本家階級に譲歩をせまった結果であった。だから、連合は福祉社会は「階級対立・闘争の臭いがする」と、「安心」という抽象的かつ無内容な言葉にかえたのだ。「安心」、「安全」は、職場生活に典型だが、賃労働と資本、支配する者とされる者をもっとも鋭くブツカリ合う課題である。それを「友愛」でごまかそうというのである。

生産性向上の本質

総評の階級的労働運動に逆らう組合内諸勢力は支払い能力論へと「洗脳」された。洗脳の屁理屈が「生産性三原則」にもとづく生産性向上だ。生産性向上に協力することとで、労働者の労働諸条件・生活は向上するというのだ。これはウソ、ごま化しの「理論」である。生産性向上は、資本主義体制のもとでは、資本の生産性向上と現れ、労働者には政治的、経済的、社会的不安の増大となる。これが本質だ。

第二次世界大戦後、日本労働組合の賃金論は①総評時代（一九五〇〜一九七〇）は賃金は労働者の生活費、賃金は労働力の再生産費といった労働価値説に重点をおいた、②大きく変わったのは一九七〇年代はじめ春闘が国民春闘へと発展し、日経連と鉄鋼労連が生産性基準原理で賃上げ抑制をはかった。その結果が経済整合性論、物価プラス定昇プラス生活向上分とする要求根拠とされた。③二〇世紀後半から時代は変わり慢性的恐慌が当たり前となった。物価はマイナス、だから経済整合性論は破たん、JC集中回答も破たんした。

賃金要求根拠そのものが破たんした。二一世紀に入ってから連合の要求はゼロ、これは労働組合そのものの破たんであった。連合の運動論を裏でつくっているのが日本生産性本部だ。同組織は連合を日本労働運動の「四番」にすることに力をつくす。連合幹部は方針を変えた。

- (1) JC集中決戦は破綻した 上位平準化から下方平準化へ
- (2) JC中心の大幅額率要求の根拠も失われた―デフレの時代にあつてかつての定昇+物価+ペアにはもどれない。この方式はとらない。
- (3) インフレの時代にはたたかかってとれた。今は企業の労働者がストライキを構えて、パイの分かち合いを求めて賃上げの波をつくる時代ではない。
- (4) 大手正社員の賃金は高い。一律額率ペア要求は大手と中小、正社員と非正社員の格差を拡大する方向に作用する。
- (5) 少子高齢化、人口減少は市場縮小をもたらすから、大手はがまんして、中小・非正規労働者とパイを分かちることが必要だ。
- (6) 要求時点からの格差是正や大手追従・大手準拠のこれまでの発想を転換する。
- (7) これが『底上げ・底支え』で、こういう春闘なら企業の業績をそこなわず、労資が手を携え進んでゆける。」

新方針

この結果が一六春闘で全面化された新方針だ。具体的にはこうである。

労組の役割と課題は、労組は社会、経済の構造的な問題解決（資本主義社会の持続的成長）はかる「けん引役」であり、デフレからの脱却と経済の好循環つくるとの視点から四点を方針とした。

- (1)「底上げ・底支え」と格差是正の実現
 - (2)中小企業労働者、非正規労働者の処遇改善
 - (3)大手追従・大手準拠の構造の転換
 - (4)賃上げはマクロの観点から「2%程度」を基準として定昇含め「4%程度」
- 大企業正社員労働者の要求は「2%以上」から「2%程度」へと切り下げられた。格差是正に力点がおかれ大手要求切り下げ、中小、非正規の底上げ「底支え」が要求となった。要求しなければ戦いにならぬ。資本は「上げて欲しくないんでしょ」「幹部のメンツたてなければ」が回答基準となる。労働者賃金が上がらないのはあたり前。連合幹部は記者の「こんな賃上げでいいのか」に、非正規上がった、正規と非正規の格差が縮まった、物価上昇ゼロでの賃上げは大きな成果と、「型の理論」を繰り返す。最後は連合会長様がマイクをにぎり、「理解を」。記者会見はこの繰り返し、これが連合労働運動の現場である。

◇小原稔さんからの手紙◇

国労運動の過去、現在、未来

一歩前 に出る 戦いを

六年間、「上野反合研」の代表を務め、国労上野支部の闘いを陰ながら支えてきた小原稔さんが、JRを退職し、国労本部家族会会長を務めてこられた奥さんの鏡子さんと共に、出身地の北海道池田町に帰ることになった。以下は国鉄・JRを通じ四〇年余になる半生を振り返る。

労働者としての目覚め 一九七五年一月、高校を卒業してから働いていた釧路の本州製紙を退職し、国鉄に臨時雇用員として就職、地元池田駅勤務となった。入ると同時に組合役員から、「この駅には国労と鉄労がいるがほとんどが国労である、国労に入らないか」と声をかけられ、国労に加入した。

翌年の四月に準職員となり、池田駅の構内貨物入換え作業の仕事のかたわら、「まなぶ」の先輩からの誘いで学習会・動員・会議などに参加する中で労働運動に関わるようになり、「労働組合は・労働者はこうあるべきだ」と目覚め始めた。

私が鉄道に入った当初は、休憩室で食事したら先輩から一〇年早いと言われ、トイレの横で食事をとっていた時代であった。封建的な職場で「労働組合」とは名ばかりで、休憩室で食事が出来るようにすることから始めた記憶がある。分会青年部も三〇名位いたが、常任会や集会を開催しても集まらなく、どうしたら集められるかが課題であった。飲みに関連して行き、悩みや愚痴を聞くことから始め、少しずつではあ

るが集まるようになり、諦めることなく地道にやることが重要だと勉強させられた。

分割民営化により、紙切れ一枚で一方的に首を切られた悔しさ 第二臨調が発足した一九八一年以降、全国一斉に国鉄当局の攻撃が始まったが、分会役員は現場協議を当局との取引の場としてしか考えていなかったため（幹部請負）、分会運動が弱体化し、当局の攻撃にすすべもなく、組合員からの不満に対しては、「お前がやってみる」とまで言う始末。一九八五年「分割・民営化」が閣議決定された頃から「分割・民営化」＝首という言葉が出始めてきた。青年部は五千万署名やローカル線（池北線）廃止反対の署名活動で、マスコミ報道（ヤミ・カラ）だけを信じる住民に対し、自分の賃金明細を見せながら署名活動を精一杯取り組んできた。

一九八六年一〇月第五〇回臨時全国大会（修善寺）で本部方針が否決された夜に、分会は全体集会を開催して「新組合を作る」提起をし、集会を重ねた（私だけ集会に呼ばれない事が続く）。仲間八名ほどで手分けし、「国労をやめるな」と自宅に足を運びオルグを重ねたが、「俺は池田に残りたい・首になりたくない・生活が不安・子供や親のこともある」等々で、「すまないが脱退し鉄産労に行く決意をした」と言われ、一人も戻す事は出来なかった。

不採用、葛藤、広域へ 一九八七年二月一六日「新会社採用通知」が出され、忘れることが出来ない日となった。私は心の中で「採用」と言う言葉を待っていたが、結果は「不採用」と言われた。理由を問いたずすも、「管理委員会が決めたこと」としか言わず、納得しないまま駅長室から帰された。家に帰り妻には「不採用だった」としか言わなかった。親（元勤労）に伝えたら、「これからどうするのか、他の人は国労をやめたのになぜお前はやめなかったのか」と言われ、返答に困り電話を切った。この悔しさは一生忘れない。

一九八七年四月一日JR発足とともに「清算事業団雇用対策池田支所」が発足。一三〇名ほどが三部屋に分けられ、三年間の期限付きでスタートする。目的は再就職の斡旋だったが、新聞の求人広告が張つてあるだけであった。出勤して点呼が終われば自学自習で何もすることがなく、個々バラバラに好きな事をするしかない不安な日々であり、何も悪いことしていないのに、理由も言わず紙切れ一枚で一方的に首を切られた事への思いを心に秘めながらの毎日だった。このような生活では人間ダメになるという事で、部屋ごとに毎日集会を開催し議論を重ねてきた。

個々人の気持ちと話せるようになった翌年八月頃、広域採用を進めるために、本部役員と地元から東京で採用になった組合員が来て、「東京でガンバロウ！そんなに悪いところではない」と説得に来た。多くの意見は、「首を切られた悔しさが忘れられない」「地労委闘争で勝利して職場に戻るといふ気持ちで頑張っているで行けない」という意見だった。その後も「地労委闘争も本当に勝てるのか不安、三年経てばまた首を切られる、そうになったら自分の生活はどうしていくのか」など議論を重ね、「子供や親の事も考え家族と納得いくまで話し合い結論を出してほしい」と提起された。

私も、親から「お前は長男だから面倒を見てくれ」と言われていたこともあって広

域に行く気はなく、妻も、行きたくないがどうやって生活するのかと心配していた。しかし仲間から「残って一人で闘えるのか」と詰められ、「どうしても北海道に残らざるを得ない仲間を支えて共に闘い、勝利して我々も北海道へ戻ろう」と確認しあい、JR東日本への広域採用に応じる（国労本部方針）決断をした。

後の話になるが、東京のある役員から「なぜお前たちは来たのか？ 闘うため？ かつこいいこと言うな」と心無いことを言われ、定員割れでほとんど全員採用になった本州の人に、一度首を切られたうえ広域に来るまで悩んだ葛藤がどれだけわかるのかと思った。

解雇撤回を闘う闘争団を支える 一九八九年四月、私は松戸車掌区の会議室で一ヶ月の教育を受け、上野要員機動センターに配属された。出向者も含めると二〇〇名ほどの分会でほとんどが国労組合員だった。分会執行委員になって出向先のオルグ等を取り組んだ。来て二年目の事、出向者を本務に戻すため「国労バッチを外してくれ」と提起があった時は、悔しくてしようがなかった。この時は外さないと決め、国労バッチ着用を理由にした昇給の四分の一カット・手当5%カットはその後も毎年続いたが、松戸営業機動センターの時、全員で議論して外すことにした。

この時、何でも下がってばかりで運動が強化されるのかと、機関役員に不信感を持った。清算事業団から来た仲間も年数がたつにつれ集まらなくなり、運動から遠ざかっていく姿に、広域に来る時の悔しさ・涙は何だったのだろうと思えてならなかった。時・場所が変われば、人間こんなに変わる、怒りが薄れていくのだと実感している。これも全て「分割・民営化」がもたらした、国労差別・攻撃なんだと思ひ知らされた。

清算事業団が一九九〇年三月で解散後、「二度首切られた」仲間が闘争団を立ち上げ解雇撤回闘争を闘っていく勇姿を見て、我々も頑張らなければならないと痛感させられた。広域採用の時、家庭の事情で応じられなかった仲間・やむなく広域を選択した我々、どこにいても闘い頑張ろうと確認してきたことが無駄ではなかったと思った。清算事業団にいた時の手取りは七万円で生活していたが、こちらに来てからは賃金が倍の生活で楽だった。だから、物販・アルバイト生活をしながら解雇撤回闘争を頑張っている闘争団員のために何が出来るのかと思ひ、東京の組合員らへの物販の協力、他単産に足を運んでの物販の販売、闘争への協力要請を積極的に取り組んできた。

各地労委闘争も勝利していて希望はあった。しかし一九九八年五月東京地裁で敗訴し、その後、「四党合意」に反対して鉄建公団訴訟を行う闘争団組合員を処分する組織を見て、非常に腹がたった。

反合研の結成 広域に来た頃は「党員協」としてやってきたが、「四党合意」の頃から国労は考え方が変わってしまったため、我々は反合研を結成してきた。合理化に反対して闘おうとする姿ではなく、運動が停滞したままであることから、まず、機関を変えていくためには、自分自身の強化ということで学習会や交流をし、職場の議論を活発にし、職場の改善をしていくために取り組んできた。

たとえば試験制度。国鉄時代もJRでも、試験制度は差別し支配する道具であると

理解はできるが、生活があるからという考えがある。国労機関は、「試験を積極的に受け、国労の差別を明らかにし是正する」と言うが、受かったのは役員、一〇年以上受け続けたが不合格など、むしろ機関不信を招いている。私も試験制度に対しては反対であると言ってきたが、反合研としても十分に議論すべきだと思う。

学習と闘いと 古典の学習は、労働運動に非常に大切である。人間には生きる権利があり、働き続けなければ生き続けられない。だから生きるために闘い続けなければならぬ。そのためには、仲間を増やさなければならぬ。家族・職場の仲間・社会のすべての労働者へと増やすことである。この間、資本の仕組み・労働者の世界観を一〇数年間学習してきた。闘おうと機関がしないのであれば、職場で議論し、問題があればみんなで議論すると問題点も明確になる、そして闘う。他の職場がしていないから下がるのではなく、一歩前に出た闘いも必要である。要員が足りない不満は職場で蔓延しているので、三六協定破棄を考えて議論したが、できなかつたので協定締結を一年から三ヶ月にして抵抗した。

今、職場では委託や機械化が進み、人が減らされる中で我慢させられ、「労働強化で体がもたない」「定年まで働き続けられるのか」と言う声が聞こえるが、特にG（グリーン・スタッフ＝契約社員）やJESS（JR東サービス・ステーション）の仲間など、一生働き続けるために、時には強硬な闘いも必要ではないかと思うし、他単産との交流も必要ではないかと考える。

安倍内閣が進めている「憲法改正」「戦争のできる国づくり」「原発問題」「教育や年金問題」と多くの課題が山積しているが、職場の問題と働く者の共通の課題として議論をしていく必要がある。

私の目標であった、「闘いに勝利して地元に戻る」という目標は達成できなかったが、東京に出て来て、多くの組合員や反合研の仲間と知り合い運動が出来たことを感謝し、北海道に帰っても闘い続ける事を約束し、また、国労の発展を祈念し、お礼といたします。ありがとうございます。

沖縄の思い×沖縄への思い」 No. 12

『どの故郷にも戦争に使う土砂は一粒もない』

辺野古埋立土砂搬出反対全国連絡協議会・沖縄学習交流会レポート

辺野古新基地は総面積二〇五万坪のうち八割一六〇万坪が埋立地となり、その高さは地上一〇メートルに及ぶ。埋立必要土砂二一〇〇万立方メートルは東京ドーム一七個分、一〇 Stadion にすると二七四万台分に相当する。約八割にあたる一六四四立方メートルを香川県小豆島、福岡県門司、山口県防府・周南、長崎県五島、熊本県天草、鹿児島県佐多岬・奄美大島・徳之島の採石場から、残りを沖縄県内（本部・国頭）から調達する予定だ。

「辺野古埋立土砂搬出反対全国連絡協議会」は、昨年五月関係する全国の七団体で結成された。この一年、沖縄と西日本の土砂搬出地、さらには三重県津で建造される埋立用ケーソンに反対する運動など一二県一八団体がつながり、去る四月一七日二

○日には初めて沖縄現地での学習交流集会・フィールドワークが実現した。メインとなった一八日名護市内で開催された集会には、「本土」からの二八名を含む三〇〇名の市民らが参加した。

辺野古土砂採取をめぐる問題点―三名の講師の基調講演から

四月一八日の集会では、メイン講演として①向井宏さん（海の生き物を守る会代表・北海道大学名誉教授）②湯浅一郎さん（ピースデポ・環瀬戸内海会議副代表）③北上田毅さん（沖縄平和市民連絡会・現地抗議船船長）の三名が報告に立った。

向井さんは、戦後沖縄本島では埋立事業によって自然海岸が消滅していくなかで、辺野古・大浦湾を守る意義を強調し、奄美での調査の経験から、採石は山の自然を破壊するだけでなく、貯蔵場所からの土砂流出で海洋汚染をもたらし、サンゴを死滅に追い込んでいる実態を報告。辺野古に送る、送らないに限らず、採石自体が公害の源であり自然破壊であることを強調、土砂を搬出させないことが故郷の自然を守ることにつながるとした。

湯浅さんは、瀬戸内海での海砂採取反対運動の経験から、海砂採取は海底からの強引な吸収により海底地形の変化を生み、洗浄作業による泥水が透明度を下げることを指摘。瀬戸内海では、海砂採取でイカナゴが減少し、イカナゴを餌にするタイやサワラ、スナメリクジラが減少するなど、食物連鎖に影響を与えたと報告。辺野古では海砂採取と埋立が相乗的効果を生み、ジュゴンやサンゴの生態系にとどめを刺す可能性を警鐘した。

北上田さんは、米軍基地内の土壌汚染が問題にされるなかで、キャンペーンシュワブ内の土砂が埋立に使用される危険性、県外土砂に紛れ込む特定外来生物対策などが事業者任せになっている点等を指摘、県の土砂条例に罰則規定を設けること、土砂を点検する期間を九〇日から大幅に延長するなど改正の必要を提起した。今後、工事の進展の中では土砂採取場所や採取量の変更は不可避で、その都度県知事承認が必要になる。沖縄と全国が連携すれば埋立は阻止できると強調した。

土砂採取側にも広がる環境・生活破壊

土砂採取とケーソン建造の各地からは九名が報告した。

鹿児島・奄美／自然と文化を守る奄美会議、香川・小豆島／環瀬戸内海会議、福岡・門司／「辺野古埋立土砂搬出反対」北九州連絡会、熊本・天草／辺野古土砂搬出反対熊本県連絡会、長崎・五島／五島列島自然と文化の会、山口・周南防府／辺野古に土砂を送らせない！山口のこえ、鹿児島・佐多岬／南大隅を愛する会、三重・津／辺野古のケーソンをつくらせない三重県民の会、沖縄／本部町島ぐるみ会議―各地からの報告は、この集會に合わせて発行されたパンフレット『どの故郷にも戦争に使う土砂は一粒もない』（社会通信No.1217、12頁で紹介）に詳しい。土砂採取側の現状がほとんど報道されていない中で、ぜひ広めてほしい冊子だ。

以下は、報告から印象に残った点、学ばされた点についての私的メモ。

第1に、私自身の反省から。〃全国各地からの土砂搬出ができれば辺野古新基地はできない〃―問題の焦点をこのように考えてきたが、埋立側と同等の環境破壊が採取側にも生じるのだ、あらためてこの事実を突きつけられた。

第2は、関係する各地で環境問題に関わって長年の継続した取り組みがあったことである。それが辺野古土砂搬出をめぐる各地の連携を可能にした条件だろう。

第3は、多くの搬出地が過疎地・離島のかかえる問題のなかで呻吟している事実である。一三〇〇億円といわれる土砂採取・運搬費は、〃二束三文の土砂が金になる〃という辺野古バブルを生み、長年築いてきて地域の生業をも破壊しようとしている。

第4は、佐多岬・五島・奄美の採取地につきまとう、核廃棄物最終処分場計画である。掘ったあとを核廃棄物で埋め返す。辺野古新基地は、原発をめぐる闇の部分とも深く結んでいるのかもしれない。

少数者運動の連携が時代の精神をつくる

この「全国交流集会」が開かれていた同日同時刻、辺野古ゲート前ではCTS闘争の中心を担った崎原盛秀さんを講師に「第Ⅱ期・辺野古総合大学」が開かれていた。

「復帰」を挟む沖縄の七〇年代、ガルフ社や三菱開発のCTS（石油備蓄基地）建設が相次ぐ中、金武湾埋立に反対する市民らは「金武湾を守る会」を結成、食料のない終戦直後に海の恵みに生かされた経験から「海はひとの母である」と訴えた。

CTS闘争は、「復帰」とともに押し寄せた開発の波に抗う沖縄各地の住民運動を、「琉球弧の住民運動」としてつなぐことで、沖縄の環境問題に共通の認識をつくり出していった。それは今日の辺野古問題につながっている。

「全国交流集会」に参加した三〇〇人、そして「辺野古総合大学」に参加した三〇〇人。沖縄北部の一地方都市に、過去と現在から学ぶために六〇〇人の市民らが駆けつけていた。新崎盛暉さんは近著のなかで「辺野古埋立土砂搬出反対全国連絡協議会」に触れて、「地元の環境問題と沖縄の反基地運動が結びついた初めての例といえよう」（岩波新書『日本にとって沖縄とは何か』と記している）。

現状に抗う運動は常に少数者の運動から始まる。その連携がやがて時代の精神をつくり出していくのだ。そこに、辺野古新基地反対闘争が持つ希望を見たい。

政府、自治体、企業へ要求を対置しよう

最後に、今後の活動の課題として思うことを二点。

ひとつは、「山口のこえ」からの提起。山口県は県内に繁殖する特定外来生物アルゼンチンアリ防止のため、県外自治体と広域協議会をつくっている。沖縄県が県外土砂搬入規制条例を制定したように、搬出自治体からも県外への土砂搬出を規制する声を上げるべきではないか。

もうひとつは、現在取り組まれている「土砂搬出反対」「ケーソンつくるな」の署名活動を継続し、対政府・対関係企業との交渉を強めることだ。政府はもとより、私企業の経済活動であっても、環境破壊や沖縄の自治権破壊、戦争に連なる基地建設へ

の荷担は許されない。(二〇一六・五・八、毛利孝雄(沖縄大学地域研究所特別研究員)(付記)*四月一八日の集会を前後して、佐喜真美術館、普天間・嘉手納など中部米軍基地、高江、伊江島、二見以北および大浦湾などへのフィールドワークが、沖縄現地の皆さんの協力を得て精力的に取り組まれた。*四月一八日の集会報告については、一九日付『沖縄タイムス』『琉球新報』の関連記事を参考にした。(毛利孝雄)

老朽原発再稼働を許さない！ 原発のない町づくりを

— 四〇数年ぶりの美浜集会に三〇〇人！ デモ隊を地元歓迎 —

四〇年越えの原発を許さず、原発の新設・増設を認めないだけで、二〇三〇年には一三機に、二〇四六年には日本の原発はゼロになるという(木原壮林氏)。

しかし、安倍政権は原発輸出で金儲けし、原発再稼働で生み出されるプルトニウムで日本の核武装をして軍事大国化・国連常任理事国加入を狙っているがため、鋭い階級闘争の攻防戦となる。よほどの大衆闘争を展開しないとそれは実現しない。今次参院選でも原発問題は、どこの野党も争点の前面に出さない。人々のいのち・くらしに直結する重大問題なのに。

四〇年越えの老朽高浜原発1・2号機の工事計画認可の新聞報道がなされた日、本年六月一日、福井県美浜町役場隣的美浜町保健福祉センターはあとぴあホールで、「美浜を原発のない町へ！」集会が事前予測の三倍の参加者三〇〇人の参加を得て開催された。主催は「美浜を原発のない町へ！」実行委員会。さいなら原発・びわこネットワークも賛同し、滋賀と京都からマイクロバスを仕立てるお世話もし成功に寄与。

福井県明通寺の中嶋哲演師によると、四〇数年ぶりの美浜町内集会・デモではないかとのこと。集会前段には六〇年三池闘争時の歌「人とし生きるために」が若狭の原発を考える会の橋田秀美さんから歌われ、昔も今も変わらぬ人の命を顧みない金儲け優先の大企業と自民党政権への怒りを共有した。

講演は二本。若狭の原発を考える会共同代表で、京都工芸繊維大学・木原壮林名誉教授は「老朽原発美浜3号機の再稼働を許さず、原発のない町づくりを進めよう」と題して、原発の危険性の基礎から説き起こし、活断層の巣となっている若狭の原発の危険性と四〇年越え老朽原発の危険性を詳細に展開。「自然災害を止めることはできないが、人が動かしている原発事故は止められる。3・11以降の人間性を取り戻す運動の種火を消してはならない」と結語。

井戸謙一弁護士は「司法の力で原発のない若狭へ」と題し、幸いにも東日本壊滅には至らなかつた「福島第一原発四号機の奇跡」なども報告され、日本の活断層やとりわけ危険な若狭のそれを詳述され、「原発をどうするかは、この国のありようを決める。何回かに一回の勝訴でも、司法リスクがあると安心して投資できなくなる」と、裁判闘争の重要性を披歴された。

最後に主催者を代表し河本たけしさんより「きょうは美浜町の内部的な努力と外部的的な確な働きかけが見事に合致して成功した。この力で原発のない町づくりを推進

しよう」と力強い挨拶があり。関西電力原子力事業本部を経由してJR美浜駅までのデモ行進に出発した。町内の子どもさんたちがデモ隊にたくさん手を振ってくれ、大人の方含めて心からの歓迎を受けた。

(さいなら原発・びわこネットワーク事務局長・稲村守)

◇ 読者からのおたより ◇

活用 長い間、お疲れさまでした。社会情勢に対する的確な見方等、いろいろな場面で活用させて頂きました。今後は、HPにて活用させて頂きます。購読料の残額は少額ですがカンパいたします。

(埼玉・内海勝男)

編集部より カンパに感謝。HPご期待ください。

できることを 相変わらずのご健闘、敬意を表します。当方は徐々に活動範囲を縮小しながら、なんとか自分ができることを続けていると云ったところです。

(紋別市・清野隆)

編集部より 山下俊幸さん、小林義昭さんが北海道にいらっしゃるようですね。

最後の送金 長い間ありがとうございます。最後の送金、残金はカンパ。(遠軽町・柴田義弘)

編集部より 多額のカンパに感謝です。通信は10月15日号まで。その後ホームページよろしく!

残念ですが 残念ですが、古い人間(79歳)なので。滝野さんに元気づけていただきました。残念

は心ばかりのカンパです。

(島根・福原武)

編集部より 「通信」はじめてマル三十九年、岩井章さんの「国際労研」からは四十五年。この間、一号も欠番、遅れもなし。自慢できることはこれくらいかな。

感謝 上京の際、たいへん有意義な交流ができて、ありがとうございます。

編集部より それからしばらくして帯広の仲間三人が上京、これも楽しかった。

(網走・鈴木孝)

がんばる 奈良県選挙も「戦争法反対で一本化合意」、新社会党も四党合意の一つとして参院選勝利にがんばります。

(奈良・稲葉耕一)

編集部より この間、選挙の取材ではありませんが、アチコチ回り、状況を見聞してきました。士気は旺盛、結果が楽しみです。

二十代から 長い間お疲れ様でした。私も二十代から七十前まで勇気づけられ、がんばってこれました。ありがとうございます。

(鹿児島・山下徹志)

さらに奮闘を 一九八四年、全通運動に日々明け暮れた私に、友人より紹介され三十二年。三年前郵便局を定年、現在再雇用、労働者として生き方を変えずにこれたのも仲間、社会通信のものの見方、考え方、思想的な誌論の役割り、影響も大きかったと思います。長い間ありがとうございます。

(都城市・こだま)

編集部より こちらこそ、こだまさんのご健康、ご活躍を祈ります。

戦線拡大 長年にわたり、通信をとおしてご教授いただきありがとうございます。四月の上越市議選でお世話になった牧田さんは、現在、参院選の野党統一候補森ゆうこ当選に向けがんばっています。

(新潟・小山一郎)

編集部より こちらこそ、お世話になりました。牧田さん、そして小山さんのご活躍を!

残りはカンパ 「携帯」を先日やっど持つようになりました。PCは勿論なし。これまでありがとうございます。

(東海村・川野弘子)

編集部より 多額のカンパ申し訳ありません。感謝です。東海原発廃炉めざし、さらにご活躍を。新生活 昨年末、旭川に移り、新たな生活を始めました。「通信」HPとのことですが、これから

(旭川市・只石勝彦)

編集部より 只石さんも新たな出発、私も十一月から新生活です。

感動 血が通って脈打っている頁、拝受。感謝いっぱいです。特に玉木節子さんの文章、懐かしうれしかったです。山口で頑張っているらっしゃること、感動しました。

(柏市・柳田祥子)

『わが涙涸々』 通信No.1218『おたより』欄「あまりにも強引な」の見出しに、『詩集わが涙涸々―原発にふるさとを追われて』(小島力・西田書店)が浮かびました。この詩集は多くの方達に読んでひろげて頂きたい一冊です。

(東京・兼子千栄子)

編集部より 早速拝読しました。怒りと無念が胸に迫ってくる詩集ですね。小島さんは郵便局で働きながら、原発反対の運動、音楽運動などに関わり、詩を作り続けてこられた。3・11追われ

て東京へ。百十年前の七月一日、谷中村は強制廃村。政府の加害者責任隠しはいずれも酷い。